小豆島霊場と香川の写し霊場概観

田井　静明（瀬戸内海歴史民俗資料館館長）

An Overview of the Shodoshima pilgrimage and replica pilgrimages in Kagawa prefecture

Director, Seto Inland Sea Folk History Museum
Yoshiaki TAI

On the island of Shodoshima、which is part of Kagawa prefecture and situated in the eastern part of the Seto Inland Sea between Shikoku and Honshu, there is an eighty-eight temple pilgrimage route, which is estimated to have been established in the latter half of the Edo period and visited by people not from Shodoshima.
Presently, this pilgrimage route is called "Moto Shikoku"(original Shikoku) and it is believed to not be a replica of the pilgrimage route on Shikoku, but something that developed on its own.
When examining the relationship between the pilgrimage route on Shikoku and Shodoshima or other replica pilgrimage routes in various places, it is very important to consider whether the pilgrims are only local people or outsiders, and whether the pilgrimages are consciously welcoming such outsiders.
From at least the end of the Edo period until the Meiji and Taisho periods, it is known that visitors came from such places as Tottori, Okayama, Kyoto, and that the local people paid attention to the visits by such people.
In this paper, aside from the time when the sacred sites were formed, I examine the history of the pilgrimage route in Shodoshima. I also focus on the time the priests and the pilgrims, who were mentioned in the inscriptions on the stone monuments, research etc., started to recognize the sites in Shodoshima as sacred ground.
Moreover, I introduce the activities conducted by the Shodoshima Reijokai, which was established in 1913, to attract more pilgrims not from Shodoshima.
In addition, I describe several replica pilgrimages and Shikoku pilgrimages on islands in Kagawa prefecture and examine the relationship between the Shikoku pilgrimage and the replica pilgrimages.
Furthermore, I examine the connection between the origin of the replica pilgrimages and the people who made the Shikoku pilgrimage.

はじめに

写し霊場には、四国八十八ヶ所、西国三十三所、親鸞聖人二十四輩などがある。山本準氏は写し霊場設置の要素として、「写し対象（番数・寺院名称・本尊・詠歌等）」、「設置形式（掛軸・石仏・堂宇・寺院等）」、「設置規模（集合・里山・地域（集落・村単位）・広域（郡・国単位）」、「設置主体（個人単独・寺院単独・住民団体・住民寺院連合・寺院団体等）」、「設置目的（信仰・追善供養・信者獲得・町興し等）」をあげ、写し霊場を国写し型、村写し型、里山型、集合型に分類した[1]。写し霊場を分析する指標として有効であり、これにより設置者側・霊場側からの写し霊場のあり方はかなり整理されるものと考えられる。

小豆島霊場や他の島四国霊場、各地の写し霊場と本四国との関係性を考えるとき、そうした写し霊場を巡る人たちが、設置地域の人たちだけなのか、他所から来る人たちが多くを占めているのか、または他所からの来場を意識して営まれているのかが重要な視点の一つとなると考える。

本稿では霊場としての成立時期はさておき、金石調査等から伺える島外からの修行者や回国行者がいつ頃から現在の小豆島霊場を霊地として意識しこの地を訪れたかに焦点をあて、小豆島の霊場化の一端を見てみ

ることにする。また、大正２年（1913）に設立された小豆島霊場会が取組んだ島外からの参拝者獲得のための施策についても紹介する。あわせて、香川県内の島四国や写し霊場のいくつかを紹介し、本四国と写し霊場との関係性や写し霊場の成立と本四国を巡る人たちの関わりについて検討する。

１　小豆島霊場

(1)　小豆島霊場の成立

小豆島霊場については、遅くとも江戸時代の後半には88ヵ所の霊場が設定され、島外から霊場を巡る人々が訪れていた。現在、小豆島ではその霊場を「元四国」と呼び、本四国を写した霊場ではなく、独自に発達したものと言っている[2]。確かに小豆島霊場は、他の多くの写し霊場や島四国と異なり、本四国の１番から88番の本尊や寺名を写した形にはなっておらず、88の山や岩窟、海辺の寺院や堂庵で設定されている。宗教民俗学者五来重も「小豆島や安芸の宮島（弥山）や竹生島、あるいは金華山、男鹿半島などを巡る巡礼も古くからあったとおもわれる・・・」と、本四国同様、古くからの霊場であった可能性を指摘している[3]。今も一部の霊場には、「行場道」の道標が建つなど、修験者の修行地にもなっている[4]。

小豆島霊場の成立や展開については、小田匡保[5]や川野正雄[6]らによって論じられており、『讃岐史初編小豆郡部』以後、巷間に知られた貞享３年（1686）創始説[7]にも慎重な意見が提示されている。また、近年、瀬戸内海歴史民俗資料館で調査した金石資料や史料からも、江戸時代前半に遡るものは見い出せていない[8]。

(2)　小豆島霊場の展開

江戸時代の終わりに編纂された『小豆島名所図会』は既に小田が指摘[9]しているとおり、小豆島霊場の１番から順に名所や地誌を記述しており、小豆島霊場の周知を意識して刊行されたことがうかがえる。また、明治、大正時代以降の小豆島霊場では、鳥取・岡山・兵庫・京都などの島外からの巡拝者が多く、その地域に多数の先達がいたことが知られている[10]。

特に大正２年（1913）の小豆島霊場会の設立は、当時の小豆島郡役所が推進した神懸山（寒霞渓）名勝指定とともに郡役所の二大プロジェクトの一つとして、島外からの参拝者・観光客獲得のための取り組みだった。小豆島霊場会の設立は、大正２年までに設立されたという本四国の霊場会（四国霊場連合会）[11]と同時期である。小豆島霊場会設立時期の経緯は以下のとおりである。[12]

明治四十三年六月大阪朝日新聞大阪毎日新聞中国民報香川新報實業新聞及四国新報六新聞記者一団トナリテ巡拝シ各其紀行ヲ掲ケテ霊場ノ紹介ニ努ムルアリ大正二年十二月郡保護ノ下ニ小豆島霊場会設立セラレ霊場並ニ郡内ニ於ケル名所旧跡ノ顕揚巡拝者ノ優遇ヲ目的トシテ活動セルアリ参拝者益々増加シテ南無大師遍照金剛ノ唱名松風涛聲ト和スル所法悦ニ咽フモノ年ト共ニ多キヲ算スル

また、大正～昭和初期の霊場会活動の具体的な施策については次に記す。[13]

大正十五年郡役所廃止ノ為多少ノ頓挫ヲ来シタルモ猶且毎年数万人ノ参拝者アルノ隆昌ヲ呈セリ然レトモ霊場会トシテハ決シテ之ヲ以テ到達点トセス寧ロ出発点トシ来ル昭和九年ノ御恩忌奉修ヲ機会トシ事業方針ヲ確立シテ以テ霊徳ヲ宣揚シテ十方有縁ノ信徒ニ安心立命ヲ與ヘシムルハ勿論本霊場ノ発展ト広ク天下衆庶ノ自他幸福トヲ増進シ一層宗教的信仰ヲ堅固ニセントスル計画ニシテ其ノ具体的方法ノ主ナルモノ左ノ如シ

一　霊場会事務所ヲ建設スルト共ニ専任事務主管ヲ置クコト
一　小豆島霊場大師教会ヲ組織シテ各種ノ事業ヲ行フコト
一　ポスター案内記等ニ依リテ一層積極的ニ宣揚スルコト
一　団体募集ノ実際運動ニ着手スルコト
一　巡拝者ヲ優遇シ霊場参拝の真意義ヲ達成セシムルコト
一　映画布教ヲ為スコト

写真１　『小豆島霊場名所案内』

写真２　奉納車
（明治28年・83番福田庵）

一　堂庵ノ設備改善ヲ為スコト等
各霊場ノ縁起其ノ変遷顕著ナル霊験巡拝者ノ心得附近ノ名所等ニ関シテハ大正九年小豆島霊場会発行ニ係ル「小豆島霊場名所案内記」ニ詳シケレハ茲ニハ之ヲ省略スルコトニシタリ

写真1は、大正14年(1925)同霊場会発行の『小豆島霊場名所案内』で、小豆島霊場や近隣の名所案内とともに、明治・大正時代の心身の病気平癒譚や御蔭・利益など38話の霊験記が住所氏名入りで収録されている。こうした、身近な病気平癒霊験記などの宣伝を通じて、新たな巡拝者の獲得を目指したことがわかる。現在もいくつかの霊場寺院には明治～昭和時代の病気平癒の御礼の車(写真2)や御蔭御礼額(写真3)などの奉納が見られる。

写真3　御礼額
(昭和43年・53番本覚寺)

また、小豆島霊場会では昭和10年頃に先達制度をはじめたという。[14]これは、巡拝者の増加に対して、団体巡拝者の世話や指導をする先達を霊場会が認証し、巡拝者の模範とするための制度であり、戦後は講習会を実施するなど、現在も機能している。先達は巡拝回数に応じて、権少先達から大先達までの称号が与えられ、特に霊場への功績が高かった者には特任大先達の称が贈られた。昭和33年(1958)の山陽新聞社「小豆島霊場巡り①～㉟」[15]によれば、先達制度について以下のように記されている。

特任大先達　特別推選、一級大先達　五十回以上、二級権大先達　三十三回以上、三級中先達　二十一回以上、四級権中先達　十七回以上、五級少先達　十三回以上、六級権少先達　七回以上とあり、多数度遍路の顕彰や公認先達制度の一端を知ることができる。また、当時の納め札の色については白色が7回まで、赤色が8回以上、青色が17回以上、銀色が21回以上、金色が50回以上、錦が61回以上としている(現在は先達認定回数、納め札の回数が異なる)。

小田報告[16]にある昭和57年(1982)発行『先達名簿』によれば、当時の先達総数、つまり当時少なくとも7回以上の巡拝を終えていた人は11,732人にのぼっていたことがわかる。地域別に見ると、多い順に鳥取4,571人、兵庫4,470人、岡山1,072人、京都909人、香川305人、福井238人、大坂70人、奈良40人、島根27人、愛知17人、滋賀9人、愛媛4人となっている。各寺院の玉垣や霊場近くには各巡礼団の多数遍路記念塔などが数多く建立されている。

写真4　三密会　密勝苑

また今回、霊場会のご厚意により確認させていただいた『小豆島霊場会公認団体役員名簿』(平成8年発行)には、約300団体が搭載されており、以下各地の団体数を列記する。

岩手1、石川1、福井8、三重1、京都20、大阪11、奈良3、
兵庫阪神5、兵庫但丹48、兵庫播州63、鳥取43、島根1、岡山85、香川25、高知1

こうした公認団体や多数度遍路(先達)の巡拝や動向については、各霊場に残る記念碑・顕彰碑等からも読み取ることができる。

写真5　第80番観音寺寄附銘板と玉垣

第41番佛谷山に建つ神戸小豆島講の「弘法大師入定千百五十年記念／小豆島講開講百年記念」(昭和61年)を逆算すると明治19年(1886)に小豆島講が始まったことがわかる。また、第72番札所奥の院笠ケ滝の麓に開かれた三密会(但馬国豊岡)の記念碑・顕彰碑を設置した密勝苑にある、会の創始者「平野義勝翁遺徳碑」(昭和55年建立)によれば、翁は眼病平癒を機に大正10年(1921)、三密会を設立して、昭和55年時点で会員600名を数えたことがわかる(写真4)。第3番観音寺にも「三密会小豆島参拝参拾週年記念塔」(昭和28年)があり、会として小豆島巡拝が大正12年(1923)に始まったことがわかる。第80番観音寺山門の日本誠心会建立「小豆島八十八霊場巡拝百周年記念」碑(平成22年建立)によれば、明治43年(1910)に巡拝が始まったことがうかがえる。明治～大正期に先述の鳥取・兵庫地域など県外からの巡拝団が数多く設立され、参拝が始まったことがわかる。

また、第81番恵門ノ瀧の山門にも多くの団体の記念碑・顕彰碑が建つ。「西播信楽会特任大先達月山翁百八十八回巡拝」記念碑（昭和47年建立）は、最終巡拝215回を数えた西播信楽会会長の「先達ノ範トシ遍路ノ鑑トシテ」記録・顕彰したものである。小豆島霊場の多くの境内地に、こうした多数度の小豆島遍路記念碑が見られることが、本霊場の特徴の一つと言えよう。

こうした各地の巡拝団は、個別に各霊場寺院とも繋がりをもっており、霊場寺院の玉垣や境内地の記念碑からは各寺院の檀家組織とは別に、こうした巡礼団が霊場寺院の建物等の施設の維持管理に大きな役割を果たしてきたことをうかがい知ることができる（写真5）。これもまた、小豆島霊場の特徴の一つであり、信仰を基盤にした各霊場寺院と外からの巡礼団（公認団体等）の経済関係として特筆すべき点である。

(3)　廻国行者の来島と小豆島の霊場化

現在確認できる小豆島最古の廻国関係の石碑としては、第80番観音寺の門前に建つ「奉納大乗妙典六十六部日本廻国供養塔」（正徳3年・1713年）と、ほぼ同型石碑の「奉造立四国遍路供養塔」（正徳三年・1713）である。この2基が島内の人物による廻国・遍路記念塔か島外の者による造立かは不明ながら、18世紀初頭には廻国関係者が島にいたことが知られる。

また、2番碁石山洞窟内等には下野国一翁道無（夢）が造立した島中の善根増長功徳円満、菩提などを祈った宝篋印塔や六地蔵、弘法大師像、入定塔などがある。安永3(1774)～5年(1776)にかけてのものである。

・宝篋印塔「為一嶌諸旦中善根増長功徳圓満立之／願主下野国廻国一翁道夢／安永三甲午天春三月初二日（以下略）」（写真6）
・弘法大師像「奉供養／四国八十八箇所／下野国願主一翁／安永三午三月日」（写真7）
・六地蔵各像とも「下野国願主一翁」（写真8）
・入定塔「一翁道無禅□　下野国寒川郡細戸村　日本回国六十六部／嶋中諸旦中為菩提／安永五歳丙申四月廿四日入寂（以下略）」（写真9）

写真6　宝篋印塔

写真7　弘法大師像宝篋印塔

写真8　六地蔵

写真9　入定塔

また、88番楠霊庵にも安永10年(1781)、加賀国栄須が願主となり建立した「西国四国秩父坂東」のいわゆる百八十八霊場廻国記念塔が建つ。他にも14番清滝山には寛政3年(1791)、4年の越後蒲原郡の霊源文明上座が願主となって造立された梵鐘（寛政3年）と「四十九昼夜念仏供養塔」（寛政4年）が見られる。

(4) 小結

小豆島霊場の始まりについては不詳ながら、金石文からは遅くとも18世紀後半の安永～寛政年間には、島外からの廻国者が来島し霊場化していたことが知られる。また、明治後半～昭和初期にかけては、霊場会等による教宣活動が盛んに行われ、鳥取・岡山・兵庫等の島外からの多くの巡拝者の受け入れがあった。島外からの巡拝者を前提に発展・霊場化したことがわかる。特に、霊場会の設立と団体巡拝・先達制度の充実により、前記山陽新聞紙上連載①[17](1958年）には「・・・最近ではその数（巡拝者）が断然本四国を引きはなしている。」「・・・ひとり小豆島だけが本家の四国をしのいで日本一の巡拝者を迎えるようになった。」としている。同紙では、日本一の参拝者数を獲得できている理由について、以下のように記す。

①一つの小さな島にまとまっていること。
②札所間の距離が長からず短からず、手ごろなこと。
③日数が七日で済みバスを利用すれば、三、四日で回れるところから、サラリーマンにも気軽に出かけられること。
④小豆島の風光が美しく変化に富んでいること。
⑤島の人情が厚く巡礼に親切なこと。

⑥強く広い大師講の組織を持っていること。
⑦宿泊料金が安いこと。
これらの指摘は、ほぼ首肯できるものであり、小豆島霊場の強みであったが、近年は公認団体数や先達数が減少してきており、新たな試みが模索されているところである。

2　香川県の写し霊場と島四国

(1)　香川県の写し霊場

香川県内の写し霊場については、昭和52年(1977)～54年まで、四国新聞紙上に不定期に連載された「霊場ガイド」に、四国八十八ヵ所、西国三十三所、二十四輩など約70ヵ所が紹介された。また、県内市町文化財保護協会などの調査でも高瀬町[18](現三豊市)、大野原町[19](現観音寺市)、牟礼町[20](現高松市)などの詳細な金石調査によって具体的な内容が多数知られるようになった。また、近年は、香川県の世界遺産調査の中で、県内の写し霊場約50ヵ所(小豆島霊場を除く)が抽出、調査された。そうした中、個人の方がアップされた「さぬきの石仏たち」というホームページ[21]において、県内には四国八十八ヵ所76ヵ所、西国三十三所58ヵ所、二十四輩45ヵ所が掲載されている。

以下、香川県の島四国写し霊場のいくつかについて、拙稿報告から抜粋して紹介する[22]。

写真10　粟島島四国

(2)　粟島の島四国(写真10)

三豊市詫間町粟島では、現在、4月29日の祝日に島四国の行事やお接待が行われている。2013年までは旧暦3月21日に近い日曜日に行われていた。島を時計回りに、潟地区の1番梵音寺から下新田→西浜→東風浜→中新田→上新田→潟の墓地の88番まで、石仏が配置されている。梵音寺に残る1番の石仏や手水鉢などの金石文によって、文政9年(1826)・10年頃に島に関わる廻船業者らが建立したといわれている[23]。また、梵音寺境内の他の石仏には「大正十一年四国霊場」の銘が見え、大正11年(1922)にも新たに四国88ヶ所写し霊場の石仏が追加されたことがわかる。現在、島をまわる88ヶ所の石仏は、この文政年間と大正年間の二つの石仏(文政期は弘法大師像、大正期は各霊場の本尊)のセットで配置されている。

粟島島四国の特徴は島外からの巡拝者が多いということである。このことは文献史料にも見られ、明治4年(1871)の高瀬比地二(現三豊市高瀬町)の白井成房「諸事日記覚帳」に、粟島の島四国に行った[24]ことが記されており、次に報告する瀬居島島四国などと同様、島外からの巡拝習俗を考える上で興味深いものである。

「明治四年　諸事日記覚帳　白井成房」[三月]

一同十四日、天気、風立、麦ノ寄中致申候、八幡宮妙見宮エ氏参致ス、小昼後より粟島梵音寺へ参詣致ス、同処エ着早々夜ニ入、寺へ行候処、徳重勝蔵居合、同人方へ参り候よふ被中聞、新屋新宅当方外壱人行泊申候、外の連は寺へ泊り申候

一同十五日、当賀、天気、早朝より同嶋四国順拝致し、昼頃帰り、尤半分行申候、寺へ参り、夫より徳重エ又々行、一酒茶漬を出し、手間取り、外之連は帰り、拙者は徳重嘉源太方エ行、泊り、酒出し、段取持有之候、陶山氏、家内来り皆々居合申候

一同十六日、天気、早朝より酒出し、四つ後より出立、九つ頃帰宅、外之者は昨日帰り、新屋新宅ニは詫間ニて泊り、今日帰中候、麦ノ寄中今日迄ニて済申候

写真11　瀬居島島四国

上記のとおり、「同嶋四国順拝」の文字が見え、粟島島四国を目的に、また連れ立って集団で巡拝していたことがうかがえる。陶山氏も海を隔てた向かいの荘内半島(現三豊市詫間町積浦)の人の可能性が強く、三野郡内より広く来島していたことがわかる。またその際の島の有力者の一人徳重氏一族の来島者への応対状況も

わかる。ただ、この白井氏の来島は、3月14日～16日の旅程となっており、3月21日にはなっていない。

(3)　瀬居島の島四国（写真11）

坂出市瀬居島（現在は番の州埋立てにより陸続き）には、四国88ヶ所と西国33所の写し霊場がある。現在も新暦4月29日には、盛んに島四国の巡拝とお接待が行われている。瀬居島の島四国は、昔は旧暦3月28日であったという。現在、島四国には島外の人たちが多く巡拝し賑わっている。

瀬居島島四国の由来譚としては、その昔、寛政5年（1793）、島論を二分した訴訟[25]があり、その争いに勝つよう祈念し、また勝訴したお礼に四国88ヶ所が写されたと伝えている[26]。また、島内本浦の大師堂に立てられる幟には「島四国五十年記念・昭和三十七年」の文字が染めぬかれており、その年代から逆算した大正元年（1912）もまた瀬居島島四国にとって記念碑的な年であったことが推察される。それは現在、島内を時計回りに設置されている石仏の施主のほとんどすべてが、島外、特に坂出の町やその周辺の有力者で占められており、「昔は船を仕立てて、坂出から島四国に来た」という伝承を裏づけており、粟島ほど古くはさかのぼれないかもしれないが、大正期には、島外からの島四国巡拝が常態化していたことがうかがえる。瀬居島島四国では、本浦で3ヶ所、西浦で3ヶ所、北浦1ヶ所、竹浦1ヶ所で接待が行われている（平成17年度）。

特徴としてあげられるのは、瀬居島島四国88ヶ所の石仏造立は島民による造立が中心ではなく、大正初年頃に海を隔てた坂出市域の人たちの寄進によって奉納されたことが金石文から読み取れることである。また、戦前から坂出付近から島への巡拝が多かったことが伝承としてあり、粟島同様、島四国の性格を考える上で興味深い事例といえよう。

写真12　本島のお大師まいり

(4)　本島の島四国（写真12）

丸亀市の本島の歴史に詳しい故入江幸一氏からの聞き取りによれば、もともとお寺やお堂などの多かった本島では、旧暦3月4日に「お大師まいり」といってお寺やお堂へのお参りが行われ、島内各地区各所でお接待が行われており、そのお接待をしている場所を巡ることが行われていたという。そんな中、昭和59年(1984)3月23日、各自治会長や文化財保護協会などの島内各組織が中心となって「本島霊場会」が組織され、「信仰と観光・健康」をうたって島内のお接待場所を中心に33ヶ所を設定し、本島霊場お大師まいり33ヶ所がはじまったのだという。霊場会の組織前に島外からの巡拝が全くなかったわけではないが、「本島のお大師まいり33ヶ所」が設定されてから、島外からの巡拝者が増加したという。それまでは、島内の参拝者へのお接待が中心だったというが、今ではほとんど島外からの巡拝者へのお接待になっており、各接待所では毎年およそ500～600人分のお接待を準備しているという。現在も旧暦3月4日が休みの日と重なったりすると、午前中のフェリーや特船が満員になるほどの大盛況となっている。

写真13　豊島のお大師まいり

(5)　豊島の島四国（写真13）

土庄町の豊島では現在も旧暦3月21日に「お大師まいり」といって、島内の寺や大師の祠など33ヶ所を巡っている。豊島甲生の片山家（和泉屋）に残る嘉永7年（1854）の掛幅には、片山詮庶が天保4年（1833）に妙見山中に西国33所を設置したことが記されており、それが「お大師まいり」と習合したかたちになっている。

その経緯は大正8年（1919）に当時の村長の指導により、信仰と観光のために甲生の妙見山にあった西国33所の石製厨子を島内一円に分散配置したという[27]。甲生の妙見さんを1番に、島内を西廻りに神子浜→家浦浜・岡→硯→唐櫃浜・岡の順に巡り、甲生の薬師堂を33番としている。その間、島内の明光寺（家浦）・眼明寺（家浦）・十輪寺（唐櫃）をはじめ、各地区の大師堂・薬師堂・

写真14　大島の写し霊場

地蔵堂などを経由するようにしている。現在も春の「お大師まいり」には島内外からの巡拝の人たちが出て、島内各所でお接待が行われている。

豊島島四国の特徴は、近代になって「観光」というキーワードのもとに、四国88ヶ所と西国33所の写し霊場を融合させたかたちで行われているという点である。隣島の小豆島で霊場会が設立された時期とも重なり、外からの巡拝者を意識して展開したことは、時期こそ異なるものの、本島同様、信仰と観光の融合による島外からの巡拝者の増加を目ざしたことがわかる。

(6)　大島の島四国（写真14）

高松市庵治町の大島にも、四国八十八ケ所写し霊場の石仏が建っている。大島にはハンセン病療養所があり、島内には多数の宗教宗派による宗教施設がある。現在、その一角に写し霊場の石仏がまとめられている。その設立等の経緯については、阿部安成によってまとめられている[28]。大正初年に本山寺（本四国70番・三豊市豊中町）住職頼富実毅とその高弟実相寺住職（さぬき市津田）らによって建立されたものである。当時は島を巡るように配置されていたが、巡拝者の利便性を考慮し、昭和31年（1956）に現在地にまとめられたという。

本四国とハンセン病との関わりは近年、森正人もふれている通り、業病と考えられていた当時、その救済を求めて本四国を巡る人たちも多くいたことが知られている[29]。香川県内でも葬式のあとの村念仏などの際に唱えられる『弘法大師和讃』の一節にも、四国遍路が業病に霊験がある趣旨のくだりがあり、ハンセン病患者の救いの受け皿になっていたことが知られ、その切実な思いを受けて設立されたものである。

(7)　小結

外からの巡拝者が多い島四国、外からの信仰・観光の巡拝者を強く意識して整備された島四国、本四国に救いを求めたハンセン病の療養所のある島の島四国について紹介した。香川県内の島四国の中には島民だけで行われているところも多くあるため、本報告をもって島四国の特徴や外からの巡拝者が多かったり、外からの巡拝者を意識した例が多いとまではいえない。しかし、近世末から近代、現代の交通の発達や経済の発展により、信仰と行楽、観光のあり方への影響は大きく、そうした中で島四国のあり方や求められるものも変化してきたことがわかる。

むすびにかえて

ここで報告した小豆島霊場にかかるものは、瀬戸内海歴史民俗資料館が平成26～28年度に行った小豆島霊場調査の際、報告者の佐々木[30]と同行して調査した成果の一部を使用した。また、他の島四国の調査報告については、平成17・18年度に行った香川県内の写し霊場調査の成果を使用した。後者については10年以上前のフィールドワーク等によるものであり、お接待や巡拝者の様子も変わってきているかもしれない。

島四国に限らず、多くの写し霊場で、巡拝やお接待の行事を続けているところは少なくなってきている。県内では、二十四輩や西国三十三所の写し霊場の行事をしているところは、それぞれ1ヶ所程度のようである。それに比べれば四国八十八ヵ所写し霊場の巡拝・お接待の行事を続けているところは、10ヶ所程度はある。ただ、その多くは島四国である。これは、写し霊場の中でも島の写し霊場の地勢等に起因するものかもしれない。また、外からの巡拝者の存在は、過疎高齢化をはじめとする受け入れ側の島の事情もありながら、島の事情だけではやめられない外的抑止力になっているかもしれない。

もちろん、島を訪れる巡拝者の多くは、霊場にふさわしい場やそれらを巡ること、その御蔭（霊験）を求めて来ている。また、写し霊場のほとんどは、旧暦3月21日その日に巡るだけである。瀬戸内地域を見わたしても、3月、7月、11月の21日その日に巡る場となっているところが多い。写し霊場が設置された地域の人たちが巡る場合、日が定められているのである。それに対して、小豆島霊場や本四国など、一部の霊場は3月21日に関係なく、大勢の人たちが巡っている。そこに、地域の人たちだけのためにつくられた写し霊場なのか、成立時期の新旧はともかく独自性の強い霊場かの違いが見えてくるのかもしれない。

1　山本準「四国八十八か所写し霊場―徳島県内の事例を中心として―」鳴門教育大学『四国遍路の研究』2003 p6～p8

2　ホームページ「小豆島八十八ヵ所について」https://reijokai.com/shodoshima88/about.html(2019.1)

3　五来重『宗教民俗集成3　異端の放浪者たち』平成7年（1995）　p171

4 42番西ノ瀧の境内には「皇紀二千六百年記念行場道」の道標が見られる。また、18番石門洞境内には「これより奥は修行道場につき許可なく入らないで下さい」の立て札がある。
5 小田匡保「小豆島における写し霊場の成立」真野俊和編『講座日本の巡礼第3巻　巡礼の構造と地方巡礼』1996　p169～193
6 川野正雄『小豆島今昔』1970　p189
7 小豆郡役所『小豆郡誌』1921　p223なども貞享3年(1686)創始説をとる。
8 佐々木卓也「小豆島霊場報告」香川県立ミュージアム『県立ミュージアム調査研究報告』第8号(2017)
9 小田前掲書5　p171 、大林實温「小豆島霊場の歴史」小豆島霊場会遍『小豆島八十八ヶ所霊場』2014 P27にも同様の指摘がある。
10 小田前掲書5　p172～173
11 大本敬久「1200年前の空海」愛媛県歴史文化博物館『弘法大師空海展』2014　p139
12 小豆郡役所『小豆郡誌』1921　p223～224
13 三木常吉『小豆郡誌第一続編』1936　p76～77
14 大林實温「小豆島霊場の歴史」小豆島霊場会遍『小豆島八十八ヶ所霊場』2014　p31～36
15 山陽新聞社連載記事「小豆島霊場めぐり」②　1958年4月13日付
16 小田前掲書10
17 山陽新聞社前掲記事①　1958年4月12日付
18 高瀬町文化財保護協会『ふるさとのこころ寺庵石仏編』1982
19 大野原町『ふるさとの石の文化仏教関係等編』2000
20 牟礼町文化財保護協会ほか『牟礼町の石仏』2001
21 ホームページ「さぬきの石仏たち」http://sanukinosekibutu.web.fc2.com(2019.1)
22 拙稿「香川県の写し霊場の成立（二）」瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要第19号』2007
23 安田憲司『近世讃岐粟島の海運』文芸社　2004　p91～95に「粟島八十八カ所石仏の寄進者」として石仏寄進者等を一覧化している。また、梵音寺内にある手水鉢の銘文についても紹介している。
24 和田 仁氏翻刻提供による「明治四年 諸事日記覚帳 白井成房」の3月の記事による。
25 木村秀雄「塩飽年表」塩飽広島歴史研究会『広島の歴史と民俗』2004によれば、従来、本島の宮本伝太夫によって私的支配を受けていた瀬居島が、寛政4年(1792)の宮本伝太夫の島民傷害事件を機に、幕府に訴え出て、その訴訟が寛政5年に決着し同島の住民支配が大きく宮本氏より離れることになった記事が見える。
26 香川県教育委員会『香川県祭り・行事調査報告書』2008　永澤正好報告「瀬居島の祭り」
内容は、「＜前略＞　塩飽年寄宮本伝太夫への裁判勝訴の翌年のこと（寛政5年）、伝太夫が江戸町奉行へ控訴した。寛政5年3月28日、一漁師が瀬居島へ渡りたいという僧侶を乗せてあげたら、船から88人の僧侶が下りたという伝説がある。この年、瀬居島38株（宮本氏を訴えていた瀬居島の人たち）の勝訴となり、そのお礼に四国八十八ヶ所のお大師道を定めた。文化元年(1804)には88体の伝馬地蔵尊が寄進されたという。＜後略＞」
27 徳島文理大学比較文化研究所文化部門『比較文化調査報告 第1号 豊島の民俗』1986 p68～70
28 阿部安成「国立療養所大島青島園史跡めぐりと史料(1)」滋賀大学経済経営研究所『彦根論叢№416』2018　p87～88
29 森正人『四国遍路』2014　p131～135
30 佐々木前掲書8